<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>金朝の外交制度と高麗使節：一二〇四年賀正使節行程の復元試案</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>豊島 悠果</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>東洋史研究 = THE TOYOSHI-KENKYU : The journal of Oriental Researches (2014), 73(3): 351-385</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>2014-12-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/228946">https://doi.org/10.14989/228946</a></td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Kyoto University
金朝の外交制度と高麗使節

—二〇四年賀正使節行程の復元試案—

はじめに

一章 高麗使節と外交使節

二節 高麗開京から金中都への道程

く節 高麗使節の由来と派遣時期

三節 金中都における外交使節

く節 四年高麗使節の行程

く節 金中都にて

く節 歸路開京へ

おわりに

豊島悠果
はじめに

本稿の目的は、高麗・金間の使節往来的あり方について理解を深め、当時の金を盟主とした北東アジアの国際秩序下に高麗王朝は四七五年に及んだ統治期間のなかで、後唐・後晉・後漢・後周・宋・遼・金・元・明の冊封を受け、その時々の国際状況に応じて巧みに事大外交を展開してきた。宗主国と異なり国内政治にも強く干渉した元との関係を把握しようとすることが多い。高麗が文化的先進性を認め、国家制度や文化的潮流に大きな影響を及ぼしたという点で、宋や元との関係が注目されることが多かった。高麗時代の研究の要であり、政治・経済・文化の多面点からの考察が行われてきている。一方、それぞれ百年後の期間・高麗と宗主関係にあった遼・金との具体的な通交の様相を把握しようとする試みは、かなり限られていると言わざるをええない。こうした研究状況をふまえ、本稿では高麗・金間の国交通交の撫い手であり交易の当事者であった外交使節、特に高麗から派遣された使節の行動に焦点を当てて考察する。その過程では必要に応じて仮想史料が十分に活用されているとはいえない。こうした研究調査によれば、高麗の外交政策においては、日本の国際秩序下に高麗武臣政権期の文人金克己によって撰述されたものであり、高麗後期に編まれた
表1 金克己が1204年の賀正使節の使行中に撰述した文章

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>『四六』</th>
<th>『東文選』</th>
<th>題名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>入金謝差接伴表</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝賜詔書兼薬物表</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝朝參次客省幕賜酒食衣對表</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝館宴表</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝差館伴表</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝館大宴表</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝花宴表</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝正旦赴御宴表</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝春幡勝表</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>9</td>
<td>42</td>
<td>乞辭表</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝朝辭日衣對鞍馬禮物表</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>9</td>
<td>35</td>
<td>謝館饋宴表</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>9</td>
<td>36</td>
<td>謝離館表</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>9</td>
<td>36</td>
<td>謝差送伴表</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>9</td>
<td>36</td>
<td>謝東京饋餞宴表</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>入金使臣回平州狀</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>上接伴使遠狀</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>接伴初贈物</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>再贈</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>館伴初贈物</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>再贈</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>朝参日客省幕贈物状</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>引進使贈物状</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>押宴官贈物状</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td>送伴贈物</td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td>使金過免兒島鎮寧館</td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td>胡家務館次途中韻</td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
<td>9</td>
<td></td>
<td>過東峰館河橋</td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
<td>19</td>
<td></td>
<td>鴨江途中</td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
<td>19</td>
<td></td>
<td>鷲州早發</td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
<td>19</td>
<td></td>
<td>鴨江西岸望統軍峰</td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
<td>35</td>
<td></td>
<td>癸亥年入北朝賀一使修製本國朝辞日謝表</td>
</tr>
</tbody>
</table>
金謝差乗表に於て『章宗泰和三年入金謝差乗表 神宗高麗正使李廷壽行』（次内総字）というように題の前後を正使とする賀正使節の行程において記述されたものであることがわかる。金克己、書状官として李延壽に随行した使節人員であった。この賀正使節は『高麗史』高麗史節要に記されるが、『金史』卷二九に李延壽の遺文もある。元・明・清代と続く燕行使の変遷を考える上でも興味深い事例となる。
なお正使李延壽は、高麗崔氏政権期の宰相で、この後一二七年には太尉門下侍郎同中書門下平章事判吏部事となり、門下侍中に任じられた一二七年に没した。また書状官として使行中に多くの文章を撰した金克己は、詩文の才をもって時名を知られた人物であったが、歴史史にはあり芳しくなかったようである。死後、執権崔瑀によって刊行された彼の文集『金居士集』の序文によると、壯年になって進士に及第し、老年にさかってようやく義州防禦判官に補任され、その後翰林院の職を受けたという。金後の派遣は、翰林院の職についた後の時期と考えられる。帰国後一二九年に死去する。
東人之文四六（以下四六）および朝鮮初期の東文選に収録されている。このうち四六巻九所載入

―36―
一章

高麗・金の通交について概観した論考はすでにいくつあり、特に通交初期に主な交渉問題となった保州（義州）の

頃有問題が研究関心を集めてきた。これらの先行研究の成果を土壇としつつ、本章では、高麗と金の関係がどのように推

移したのか、またその中で一二〇三・四年などのような時期にあったのか、述べることとする。

一二〇四年には高麗の東北諸州を陥落させて翌年金を建國すると、高麗は一

世無窮の好を成せ」と、兄弟関係に立って高麗に和親を求めると、高麗朝廷では高麗と金の関係が

を誇う」という内容の金太宗の表を送るが、その文脈の中でとなった金国との関係設定に関して、現実路線と強硬路線の対立

がおこったのである。議論の末、李資謙の主導で一二〇六年四月に使節を金に派遣し奉表称臣することとなっ

派はまもなく失脚するが、その後政界の中心となった金富軒・富像ら兄弟も対金懸案に因って、現実路線に

失をめぐって関係は緊張したが、宋都開封を陥落させ微宗・欽宗以下の宋皇族や官僚らを行い金に派遣し奉表称臣することとなっ

その後も保州問題や、誓表の提出をめぐって関係は緊張したが、宋都開封を陥落させ微宗・欽宗以下の宋皇族や官僚らを行い金に派遣し奉表称臣することとなっ

これにより保州は高
麗の領地を認められ、麗金外交上の懸案事項が一段落する。ただし、いまだ宋金間の戦争は続いており、高麗と宋との通交も細々と続いていた。一三三一年には金太宗が三萬の兵を率いて東京遠陽府に至り滞在するなど、緊張が生じたこともあり、また高麗内部では、金宗訨らと敵対に至り、四十七年に西京平壌で反乱をおこした。宋金間で和議が結ばれ、両国の関係は一三三一年、高麗は初めて正式に金から冊封を受けていた。一三四七年に忠獻崔宗訨をのこと、一三五一七年に西京平壌で反亂をおこした。宋金間で和議が結ばれ、両国の関係は一三三一年、高麗は初めて正式に金から冊封を受けていた。
金は宣問使を派遣して説明を求めたが、結局一九九年には册封使を派遣した。この後崔忠獻は、次の熙宗の受冊儀式を行う際に金の指導に即座しているなど、金との良好な関係を志向していた武臣政権が、高麗内部において対抗勢力を鎭圧し、権威を得て政権を安定化させるためには、金の承認が必要であり、間違っても篡奪者として討伐を受けるようなことがあってはならなかった。そのため武臣は、このような状況も長くは続かなかった。金は、大定年間（一二五五）から続いていた黄河の氾濫や、章宗即位（一二七八）後はげしくなったモンゴル族の侵陥態となった。宋との間では翌一二七年に金に有利な条件で和約の締結となったが、一方でモンゴル兵に攻撃されて死亡するなど、一層高麗が辺境で攻撃され難しくなってきた。
（1）使節の種類と派遣時期

以上のよう推移し麗金間の外交使節は、史料にも頻繁にあらわれ、朴漢明氏や姜晩琮氏がす
でにその一覧表を作成している。本節では、これらを非定期的・定期的な使節に関して、高麗王への使節や弔慰、皇帝の死去・即位や皇太后の死去である使節などがある。高麗からは、これら使節に対する詔書を加え、金使節に対する詔書を加える。金使節に対しては改元の挨拶、および外交案件の交渉などの目的として、冊封使、起使、沒使、祭使、訴書使、告喪使、告哀使などに分けられる使節である。なお、使節の派遣に関しては、高麗王の即位や皇太后の死去にある使節の派遣に関しては、高麗は東京遼陽府との間にも頻繁に使節を交わしている。

そして、金皇帝と高麗国王との間で定期的に交わされた使節についてみると、金からは一二七八年以降毎年、高麗王の誕生日祝賀する賀生辰使、さらに一二四五五年に一度賀聖節使（横賜使）を派遣している。なお君主間に交わされた使節では、金使節に対しては賀聖節使を加え、皇帝賀生辰使を祝賀する賀聖節使として、正旦を祝賀する賀聖節使、さらに二度ごとに前方使を派遣した。つまり高麗は例年、賀聖節使と前方使、賀正使と賀生辰使を通常、賀聖使あるいは賀聖節使とタイミングをあわせて派遣した。こうした麗金間の定期使節の年間スケジュールについては一二七七年の場合を例にとってみてみよう。正月九日、高麗で

二節：麗金間の使節

は前方使が派遣され、同月十七日には、金から高麗明宗の生日を祝賀する賀生辰使が来着。同日に高麗は金世宗の生日
ある日、人々は百里の館に集まり、その場で神の使が語った。時として、王たちが集まり、礼を述べた。また、人々は金から正のままで、横と使が謝った。

この日は、節分の日であり、人々が神を懸想し、感謝の気持ちを表すために集まった。王たちも、人々と同じように礼を述べた。金から正は、その場で神のことを述べた。
手がかりが得られる。金はクーデター後搬立された明宗の即位事情を疑い、
クーデターも派遣したが、一一二三年五月によ
る冊封した。そして同年さっそく、
十二月壬寅、金、牒を移して、王の生日を問う。」
慶宗の誕生日について、高麗史では、
と記しておく、金宗の誕生日を正月十九日に在り。是歳十二月	
は、正月十日に金の賀生辰使が来ているのである。

「大定二年三月、遂に封冊を賜る。啓の生日、正月十九日に在り。是歳	
十二月を以て、高麗との関係に重大なるものと看
すなり。神宗の生日である咸成節は本来七月だが、
大定甲午年（二七四）の例によって十二月一日を節日とし、恒
例とした。」

その生日について、実際とは違う日を金に申告した例のことを言うのである。
ただ表2に示したように、仁宗・毅宗など、
高麗本土において、高麗国では王の実際の生日をそのまま節日とし用いてい
た。こうしたことは、金使が高麗国内における王の生
日行事を行っているから、少なくとも仁宗・毅宗代において、
高麗国国内では王の実際の生日をそのまま節日とし用いてい
た。
『明治時代』所載「本朝時代」の指摘するように、使節が二度入界することを避けるための措置であったと考えられる。

金朝では、熙宗の天壽節以外、生日な一日を聖節とした例はみられず、遼の慣例をそのまま踏襲はしなかったよう
である。一方で高麗の場合、麗金闘では全通交期間を通じて、王の生日とは異なる日を仮定して賀生辰使を迎えていた。遼時代の慣例の影響を受けた可能性が考えられる。遼から高麗に派遣された賀生辰使の来賀時期をみると、通交開始以後、遼宗代までは高麗王の実際の生日に来賀していることが確認できるが、遼の賀生辰使は王の生日ではない時期に来賀している。遼宗の生日は六月三日とされているが、遼の賀生辰使は十一月二十日と来賀しており、異なる生日を遼に伝えていたと考えられる。遼宗の生日は六月二三日であるが、遼の派遣時期が誤っている。遼宗・遼宗代には高麗が実際には十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外國使節を迎える際には、国内を移動する間の護衛や各地での接待、各国使節の日程の差異は十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

高麗がこのような措置をとった理由については、次のような可能性が考えられる。遼宗の賀生辰使が十一月に遼使の来賀記事が見え、遼宗・遼宗代には高麗が実際には十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国の賀生辰使を迎える際には、国内を移動する間の護衛や各地での接待、各国使節の日程の差異は十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節を迎える際には、国内を移動する間の護衛や各地での接待、各国使節の日程の差異は十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎えるのが便利だったのである。外

国使節の来賀時期が一致しないのである。遼が賀聖節を改期して賀聖節と賀生辰使をまとめて派遣させようとしたのも、この理由によるものであろう。十一月の後半半正月の半ば前後に集中している。つまり高麗はこの時期に賀生辰使を迎え

るため、二月下旬頃に帰朝するのが一般的であったと考えられる。遼宗と金の落差が遼に三章で述べるように十日ほどであ
次の項目についての考察をふまえると、一二〇四年の賀正使李延壽の一行について、より具体的に把握することができると、彼らはおもに薩摩、兵庫の地名を記したものがおり、また別の高麗使節が使金した際に撰した文章などからも、経由地をいくつか拾うことができる。これらに加えて宋人の使金記録等を用い照らし合わせることによって、金克己が使行中に撰した文章などを参考にした場合の状況を再現することもできる。

る・観の制限上、ここでは考察過程を詳述せず。結果を示したにしたので参照されたい。
万歳万歳万歳と記しており、「大金集禮」と記しておる。「聖節稱賀儀」でも「萬春令節、謹上壽卮、伏願皇帝陛下萬歳万歳」とされているから、「金史」礼志も「万春令節の祝賀儀禮を收録したものとみられる。なお、後述するが「金史」巻三八禮志一に金末の一三五年に定められた「新定夏使儀注」も收録されており、西夏使節の都での九日間のスケジュールを規定している。

図2 金中都皇城・宮城配置復元図
さて、李延壽らのような賀正使節が入金した場合、「外國使入見儀」『元日上壽儀』『曲宴儀』『朝辭儀』の順に行われるところになるが、その儀礼はどのようなものだったのか。やや煩雑になるが、次に『金史』礼志の儀式次第によってその内容を示した。なお『外國使入見儀』『朝辭儀』は仁政殿、『元日上壽儀』『曲宴儀』は大安殿で舉行されたが、金宫城の配置については、図2を参照。于全杰、于光度氏の『金中都』より『金中都』改編者の『金中都』を引用して示した。
賜う旨の敕を受け、退出する。

【元日上寿儀】

① 皇帝が座につき、皇太子・臣僚・諸国の使客が入庭し、丹墀に立つ。

② 皇太子が昇殿して酒をすすめ、皇帝は疎を受けて案に置く。

③ 門使が欄内に入り祝詞を奏上する。

④ 皇太子が昇酒し、皇太子が虚殿を受ける。皇太子が降階し、皆再拜する。

⑤ 侍賓者と三節人従が入庭し、丹墀において「聖躬萬福」を奏し、左廵に立つ。

⑥ 御床が供され、皇帝が昇酒する。皆再拜する。

⑦ 侍賓者に酒をしき、立飲して再拜した後、坐す。

⑧ 三箇の後、致語・口号を誦ずる。

⑨ 七箇の後、諸国の三節人従が退出し、次に殿上の侍賓者鬼降階して退出する。

⑩ 侍賓者が座につき、臣僚と使客が入庭する。丹墀において「聖躬萬福」を奏し、左右廵に分立する。

【曲宴儀】

高麗・西夏の三節人従が入庭し、左右廵に分立する。

① 皇帝が座につき、臣僚・使客が入庭する。丹墀において「聖躬萬福」を奏し、酒食を賜う旨の勅を受け、再拜して、左廵に立つ。
果床が供され、皇帝が拝酒する。皆再拜する。

四壺に至って餅茶が供され、致語・口号を誦する。

皆再拜する。

侍宴者に酒をつぎ、立飲して再拜した後、坐す。

この間に華を賜い、皆載花して、ふたたび三節人従は左右廻り、殿上の侍宴者を降階して次に戻り、三節人従は門外に出る。

侍宴者に酒をつぎ、立飲し、再拜し、後坐す。

四 случаに対し、餅茶が供され、致語・口号を誦する。

五壺に至り、休宴。皇帝は入間し、殿上の侍宴者を降階して次に戻り、三節人従は門外に出る。

四芀に至り、三節人従が退す後坐す。

「去ってよし」と喝し、宋使副は退出する。

以上のように儀礼内容をみてみると、「外國使入見儀」では宋使の次に高麗使、その次に西夏使が入しび、最後には三

① 皇帝が座につき、宰執が昇殿する。

② 西夏使が入庭し、丹墀において「賜躬萬福」を奏し、金宮廷を懸慕する致詞を誦する。「去ってよし」と喝し、西

③ 高麗使が入庭し、西夏使と同様の礼を行う。

④ 宋使副が入庭し、丹墀に於いて「賜躬萬福」を奏し、金宮廷を懸慕する致詞を誦じた後、衣・馬を賜る。別録物

在を受け、謝恩する。酒食を賜の旨の飲を受ける。

⑤ 宋使副は昇階して欄内に入り、正使が国書を跪受し、丹墀に戻る。

⑥ 「去ってよし」と喝し、宋使副は退出する。

⑦ 西夏使が入庭し、丹墀において「聖躬萬福」を奏し、金宮廷を懸慕する致詞を誦じた後、衣・馬を賜る。別録物

在を受け、謝恩する。酒食を賜の旨の飲を受ける。

⑧ 宋使副は昇階して欄内に入り、正使が国書を跪受し、丹墀に戻る。

⑨ 皇帝が座について宴が再開される。九壺に至り、三節人従が退す後坐す。

⑩ 謝宴し、退出する。
国の使がともに丹壇に立っている。また『元日上宮儀』にも三國の使が参加しており、受賀後の賜宴では三國の使副は大安殿の殿上、三節人は左右の廊に座を構えられている。『曲宴儀』でも同様に三國の使副は大安殿上、三節人は左右の廊に座を構えられている。このような賀正使として来訪した宋・高麗・西夏の使節たちを、まず確認しておきたい。

また『外國使人見儀』における見の順番は宋・高麗・西夏。朝鮮儀では逆に西夏・高麗・宋の順に入辞を行い、高麗は五品班に列し、高麗・夏の順に入辞を行い、高麗は五品班に列す。見の順が交代される形を取る。朝鮮儀では高麗・夏の順に入辞を行い、高麗・夏は五品班に列す。前節及び臣僚の小起居の礼を完する議を表わしたものである。朝鮮儀における三国の順序は、第一に宋であり、高麗と夏を次に列す。これ亦の三国に對する行列を結ぶ。また『金史』三卷志には、次のような記録がある。

熙宗時、夏使の入見、改めて大起居と為す。延年、宋使を以て三品班に列し、高麗・夏は五品班に列す。延年二年六月、臣使の辞見を定し、臣僚の服色・拜数は止ず、常朝起居に従い、三國使の班品は旧の如し。殿前班及び臣僚の小起居の礼を完する議を表わしたものである。朝鮮儀における三国の順序は、第一に宋であり、高麗・夏を次に列す。これ亦の三国に對する行列を結ぶ。また『金史』三卷志には、次のような記録がある。

高麗が優先されているようである。ただ『金史』三卷志には、次のよう記録がある。

熙宗時、夏使の入見、改めて大起居と為す。延年、宋使を以て三品班に列し、高麗・夏は五品班に列す。延年二年六月、臣使の辞見を定し、臣僚の服色・拜数は止ず、常朝起居に従い、三國使の班品は旧の如し。殿前班及び臣僚の小起居の礼を完する議を表わしたものである。朝鮮儀における三国の順序は、第一に宋であり、高麗・夏を次に列す。これ亦の三国に對する行列を結ぶ。また『金史』三卷志には、次のよう記録がある。

高麗が優先されているような議を表わしたものである。朝鮮儀における三国の順序は、第一に宋であり、高麗・夏を次に列す。これ亦の三国に對する行列を結ぶ。また『金史』三卷志には、次のよう記録がある。
史料等を併せて解説することによって、金朝によって定められた薬正使節のスケジュールを把握することができる。燕京遷都後の金に派遣された宋使節が残した記録のうち、中都での日程を詳しく記していく傍考になるものとして以下のようなものがある。

一〇〇年の高麗対使は李延壽一行の行程の復元を課題の一つとしているため、同じく薬正使節として宋使節が隨行し、帰朝後に語録として宋朝廷に提出した『北転録』、一二二〇年の薬正使程卓が四か月余りの行程を記した『使金録』などである。本稿では、一二〇年薬正使の『使金録』が特に有用である。

正使周獻中策薦状書を開くと、北宋薬正使節一行は、一六九年十月十八日金に臨安を出發し、十二月二十日に燕京に到着している。薬正使程卓、北行日録の著者がもてはや幸にも、述べている内容が豊富であるため、ここではまず『北行日録』によって一〇〇年の宋使節の金中都におけるスケジュールを復元する。

正使周獻中策薦状書を開くと、北宋薬正使節一行は、一六九年十月十八日金に臨安を出發し、十二月二十日に燕京に到着している。薬正使程卓、北行日録の著者がもてはや幸にも、述べている内容が豊富であるため、ここではまず『北行日録』によって一〇〇年の宋使節の金中都におけるスケジュールを復元する。

正使周獻中策薦状書を開くと、北宋薬正使節一行は、一六九年十月十八日金に臨安を出發し、十二月二十日に燕京に到着している。薬正使程卓、北行日録の著者がもてはや幸にも、述べている内容が豊富であるため、ここではまず『北行日録』によって一〇〇年の宋使節の金中都におけるスケジュールを復元する。
表3 1170年宋賀正使節の金中都における日程

<table>
<thead>
<tr>
<th>日付</th>
<th>件名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>12月27日</td>
<td>燕山城外の燕賓館に至り、館伴と対面する。賜宴の後、入城し、宣豊門、宣明門を通り会同館に入る。</td>
</tr>
<tr>
<td>28日</td>
<td>会同館で酒果を賜わり、入院儀を習う。</td>
</tr>
<tr>
<td>29日</td>
<td>仁政殿での入見の日。館伴が同行して会同館を出、左監門、敷徳西門、會通門、承明門、左嘉會門を通り、宣明門外西の幕次で待機する。（その間、客省が行酒する。『使金録』）宣明門を入り、仁政門外で百官の起居が終わるのを待つ。仁政殿左門を入られ仁政殿前にいたる。大禮上の位（丹墀の位）について、入見の儀を行う。衣帯を賜って退出し、会同館に戻る。会同館に押宴使が遺され、賜宴。</td>
</tr>
<tr>
<td>30日</td>
<td>会同館に賜宴使・使酒果使・押宴使が派遣され、賜宴。</td>
</tr>
<tr>
<td>正月1日</td>
<td>大安殿での元日賀筆の日。館伴が同行して会同館を出、應天東門を入る東廬（左翔龍門の南）の幕次にいたる。隨は高麗使の幕次で、西夏使の幕次に向かい側。幕次での客省の茶酒のふるまいがおわると、使副は月華門から入り、百官の班列にしたがって列島賀筆する。侍宴者以外が退出した後、賜宴。皇帝に御酒を上った後、侍宴者は昇殿して座につく。宋使の座は、金の仏相と相対し、三節の座は於祐楼の北の東廬、高麗の三節は宋三節の南、西夏の三節はその対面（西廬）の酒七壺し、宴が終わると会同館に戻る。</td>
</tr>
<tr>
<td>2日</td>
<td>会同館で分食・酒果を賜わる。</td>
</tr>
<tr>
<td>3日</td>
<td>大安殿での曲宴の日。元日賀筆の日の宴とほぼ同儀。ただし酒七壺の後、皇帝が中座して百官に造花を賜い簪花する。皇帝が復座してさらに四壺の後、終了する。</td>
</tr>
<tr>
<td>4日</td>
<td>射弓宴の日。賜生籃・賜宴・賜酒果・押宴使が遺され賜宴。酒七壺の後、韃抜東菓を差替え、押宴使・館伴・宋國信使副らが順番に射る。</td>
</tr>
<tr>
<td>5日</td>
<td>仁政殿での入辞の日。入見の日と同行して宣明門外の幕次に於いて、客省の茶酒のふるまいを受ける。高麗・西夏・宋使が仁政門外にいたり、先に西夏使が入辞し、西夏使が退出すると高麗使が入辞する。その後で宋使が入辞し、衣帯・鞍馬・応段等を賜る。昇殿して欄内で國書を受けとり退出し、會同館に押宴使が遺され茶酒を賜わる。</td>
</tr>
<tr>
<td>6日</td>
<td>館伴とともに會同館を出発し、燕賓館にいる。賜酒果・押宴使が遺され賜宴。また送伴使副が遺され、宴が終わるとともに出発する。</td>
</tr>
</tbody>
</table>
行された。四日には會同館において射弓宴が行われ、五日には仁政殿で入辞儀を行った。そして六日に會同館を出発し、燕館に至って賛宴があり、送伴使とともに出立した。ここさらに『使金錄』で一二二三年の賀正使卓らの日程を確認していても、四月二二日に入見しており、十日間の日程は、右の一七〇年の賀正使節の日程と全く同じである。これは偶然でない。故、賀正使は一二二三年二月二二日に入見するに至ったのである。

ここで『金史』卷二八三外國傳下高麗

一二二九年・二一二二年の宋賀正使が、とともに一二二三年二月二二日に入見しているのは、金側がそのまま定めていたからである。それは入見の日付のみとまらない。

有

し夏人、天會議和より金に臣属すること八十年、兵革の事無し。貞祐の初に及び小しく侵蝕あり、構難十年に至る

とあるように、金・西夏間の十年を超える戦争状態が收拾され一二二五年に和議が成った時に定められた。その後間もなく西夏・金ともに滅びるので、この儀式が用いることはほとんどなかったであろう。金の外國使節接待制度を知る上で非常に有益である。『新定夏使儀注』におけるその規定を見てみると、次のようである。恩華館に着いて館伴と面对面し、入京して會同館に入る日を一日とすること、二日目に會同館で入見儀を習い、三日目に入見儀、四日目には會同館に押宴官、
賜賀官が派遣されて賜宴があり、五月目は賀賀儀を行い、六月目は同日で食糧と酒果を賜わり、七月目に詰宴、八月目に入賀儀を行って、九月日に会同館を出て恩賜宿に至り、帰路につく。五月目の賀賀儀は、賀賀使節であれば元日賀賀、

賀聖節でなければ聖節賀賀の儀礼を行うのである。

さて、この金末に定められた西夏使節のスケジュールを、先にみた二七八零年・一二二二年の宋使節の日程と比較すると、東西使節の出使が無く、八月日に入辞、十月日に出発したが、金末の西夏使節に関する規定では、金の事実をとり入れて東方使節のスケジュールは、金が例年の外國使節に関わる、金の時節にあう来訪する定期的な外國使節に関わる、金は都に至る日にちや、都滞在中の日数は、金の事実をとり入れて東方使節のスケジュールを規定していたのである。また、高麗・西夏使が順に入庭して儀礼を行い、五月日の使節・七月目の使節・九月日に入辞の際には、宋・高麗・西夏使が順に入庭して儀礼を行い、五月日の使節・七月日の使節に同じスケジュールが組まれていた。これより、外の日については、本節で確認できる人がいたらなかったのが、同様であった可能性が高いものと思われる。

三節 一二〇四年高麗賀賀使節の行程

本節では、これまでの考察を基にして、一二〇四年の高麗賀賀使節李延壽一行の行程の復元を試みた。前述のように、一二〇九年・一二〇年の宋使節の場合と同様、中都には十二月十八日正月六日の十日間滞在し、概ね同

一月上旬中旬に派遣され、二月下旬頃に歸朝するのに一般的であったと考えられるから、この時期を派遣期間として想定した。また、一二〇・一二〇三年の宋使節の場合と同じく、中都には十二月二十七日正月六日の十日間滞在し、概ね同

一月上旬中旬に派遣され、二月下旬頃に帰朝するのに一般的であったと考えられるから、この時期を派遣期間として想定した。
李延壽ら高麗使節の行動を復元した。なお、宋使節の使金記録で正月四日に舉行が記録されている射弓宴に関しても、表
1中にその挙行を示すものが無いため、同日の日程は未詳とした。あくまで仮定にとづく試案に過ぎないが、考察の結果、以下のようない行程が最も適性が高いものとして提示できる。

① 高麗開京から金中都へ
② 一二〇三年十一月上旬、差遣され、開京を出発する。
③ 鳥州を通過。
④ 鳥州早発

七言絶句である①の初句に「漏篤逢逢五更を報ず」とある。一行は麟州に泊まり夜も明けきらぬ早朝に出立した

義州で鴨緑江を渡り、金の領域に入ると、接伴使を附して都までの路をとる。そして来遠城で接伴使と面会した

接伴使初贈

①接伴使遠状
②入金謝差接伴表
③接伴使再贈

④外國使節が領域内に入ると、接伴使を附して都までの路をとるが、當時、朝鮮半島の東の近畿関係は鴨緑江

での領土にいたる前に遠状を送って到着を知らせ、接伴使と面会して贈物をする。

来遠城にいたる前に遠状を渡って到着を知らせた①。また接伴使には少ないとも一度贈物をした。接伴使と面会すると、

②接伴使遠状
③入金謝差接伴表
④接伴使再贈

は接伴使に対して贈った物に附したものを贈る。皇帝に接伴使の差遣を感謝する表を

時点かと推測されるが、確証が得られないため、ひとまず本項にまとめて掲げておく。

間兒島鎮寧館を通過。
金中都にて

使金過免児島鎮寧館

胡家務館を通過。

前節で掲げた『金史』礼志、外國使入見儀之一節において、往路の金領域内においても同様の高麗使節来訪の報文が下達されることが明らかであるが、従って当国の領内においても同じように観察されるべきである。

表を立て、館伴使に贈物をする。

表に添え、館伴使に贈物する。

十二月二十七日、燕京郊外の恩華館に到着し、館伴使と対面した後入京して宿館に入る。館伴使の差遣を皇帝に感謝する表を奉せ、館伴使に贈物をする。

・十二月二十八日、宿館において入館儀を習う。引進使に贈物をする。

入見儀を習ったことは、表1の文章中では確認できないが、外交儀礼の慣例に属するものであり、高麗使節も行った
に殿日一正・での物押から側使例会大催で館状物謝参
れをと儀夏定﹁參（怒着幕営著【】）, 柔帳汁嘔嘔【】)

(示範程営著【】), 柔帳汁嘔嘔【】)

に賜日十二無參(怒着幕営著【】)。落}

正稿様すれ掲c3696宿こえと掲c3666儀夏定﹁參(怒着幕営著【】)、

例て會大催で館

表水沔

参(怒着幕営著【】)、

高麗

京

怨﹁參(怒着幕営著【】)、

之

為

入

之

奉

之

照

省

同

會

同

之

大

催

省

照

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省

省
正月二日、立春の幡勝を賜る。

幡勝とは飾りものの細長い旗で、宋や遼、高麗では立春に幡勝を頒賜する慣例があった。

春に外国使臣に幡勝を下賜していることがわかる。なお表3では、この日に宿館で食糧・酒果の下賜を受けていたが、

正月三日、大安殿における曲宴に参加する。

正月四日、未詳。

正月五日、仁政殿で入辞儀を行う。その後、宿館において公服・鞍馬などが使節人員に下賜される。

「10乞辞表」

癸亥年正春朝賀、使修製本朝朝辞日謝表、

「11謝朝辞日衣對鞍馬禮物表」

入辞に先立ち、あらかじめ乞辞表を奉って入辞・離館の許しを請う（10）。入辞の日には、正使以下の使節人員に禮物が下賜された。

「12謝館館筵宴表」

日朝辞の次で、伏して聖慈を蒙り、臣に公服・鞍馬・駄賜物を贈った金玉が、自らに賜った禮物について謝した表であり、正月四日の表には、輕装・帯刀・特に佩侍の華を加え、逸驥・寶鞍、先づ遠慮の役を請うたる、使副はじめ、他の使節人員への賜物に含まれていたようである。

正月六日、宿館を出発して恩華館に到り、筵宴催される。送伴使と対面し、贈物をする。館伴使と別れ、送伴使と

ともに出発する。
以上、一二〇四年の賀正使節人員、金克己の撰述した文章を手掛かりとして、金朝の儀禮関連史料、および宋人の使金記録から把握される金の外交使節迎接制度に照らし、使節の行程を復元してきた。推論を重ねた部分もあるが、麗金間の使節往還の具體像を描くという目的において、一定の成果を得られたと思う。最後に、本稿の考察を通じて認識された課題に関しては、すでに若干の論考があるが、次にあげる史料を見ても、彼らの交易規模が小さなものでなかったことは容易に察せられる。

（八月）は月に、兩府宰執奏す。每歲奉使して金に如く者、修繕に利ありとし、多く土物を営す。轉輸の弊、驛吏之に
中央に物品が集まており、使節交渉に便利であったと論じる。しかし高麗からの進物物・謝賀生辰使・謝横宣使の派遣時期は、十一月に固定されているわけではない。明宗以降の例をみると、本文で述べたように賀正使・聖節使のどちらかにあわせて派遣されていると見えるのが妥当であり、金が派遣した賀生辰使の派遣時期の問題は一旦区別して考える必要がある。氏が論じるように、賀生辰使の派遣の重要性に関して注目すべきであり、高麗の使節の派遣時期の決定を考察するが必要である。氏は、金からの横宣使が来朝する六月は、王の奉恩行幸が集まる「高麗王室と臣僚らにとって大切な贈り物になった」とする（「四・五頁」。しかし奉恩行幸・菩薩戒道場・都目政事によって、特に中央に物品が集まる時期とみなすことができるのか、また金が西夏に対してすることは明らかである。例えば四月（三月を含む）に横宣使を派遣すれば、賀生辰使の派遣時期を高麗の年中行事に合わせたものと考える。)

「金史」は、熙宗五年の正月は賀生辰使の派遣が決められており、この熙宗五年の正月に賀生辰使の派遣が行われた。氏は、賀生辰使の派遣が行われたのは、賀生辰使が来朝する六月である。賀生辰使の派遣時期の決定を考察する必要がある。氏は、金からの横宣使が来朝する六月は、王の奉恩行幸が集まる「高麗王室と臣僚らにとって大切な贈り物になった」とする（「四・五頁」。しかし奉恩行幸・菩薩戒道場・都目政事によって、特に中央に物品が集まる時期とみなすことができるのか、また金が西夏に対してすることは明らかである。例えば四月（三月を含む）に横宣使を派遣すれば、賀生辰使の派遣時期を高麗の年中行事に合わせたものと考える。)

「金史」は、熙宗五年の正月は賀生辰使の派遣が決められており、この熙宗五年の正月に賀生辰使の派遣が行われた。氏は、賀生辰使の派遣が行われたのは、賀生辰使が来朝する六月である。賀生辰使の派遣時期の決定を考察する必要がある。氏は、金からの横宣使が来朝する六月は、王の奉恩行幸が集まる「高麗王室と臣僚らにとって大切な贈り物になった」とする（「四・五頁」。しかし奉恩行幸・菩薩戒道場・都目政事によって、特に中央に物品が集まる時期とみなすことができるのか、また金が西夏に対してすることは明らかである。例えば四月（三月を含む）に横宣使を派遣すれば、賀生辰使の派遣時期を高麗の年中行事に合わせたものと考える。)

「金史」は、熙宗五年の正月は賀生辰使の派遣が決められている。氏は、賀生辰使の派遣が行われたのは、賀生辰使が来朝する六月である。賀生辰使の派遣時期の決定を考察する必要がある。氏は、金からの横宣使が来朝する六月は、王の奉恩行幸が集まる「高麗王室と臣僚らにとって大切な贈り物になった」とする（「四・五頁」。しかし奉恩行幸・菩薩戒道場・都目政事によって、特に中央に物品が集まる時期とみなすことができるのか、また金が西夏に対してすることは明らかである。例えば四月（三月を含む）に横宣使を派遣すれば、賀生辰使の派遣時期を高麗の年中行事に合わせたものと考える。)
金にかけられる王の儀礼の整備にあたっては、﹃金榜﹄卷二八礼志一の冒頭にしても端掲館に述べられるとするように、特に世宗代を中心に多数掲載した宋の制度を参照し襲っている。各儀礼の整備過程や挙行実態については、さらに個別の研究が求めるにあたる。
SYSTEMATIZATION OF THE ORGANIZATION AND NUMBER OF EARLY QING SUPERVISING SECRETARIES AND CENSORS

XIANG Qiaofeng

From the perspective of official personnel from the Ming dynasty onward, Supervising Secretaries and Censors were the “pure and vital” posts that, along with the membership in the Hanlin Academy (翰林院) and the Ministry of Personnel (吏部), were the most important approaches for advancement to Senior Officials (京堂官), Minister of the Ministry of Personnel (吏部尚書) and Grand Secretary of the Grand Secretariat (內閣大學士).

Supervising Secretaries and Censors supervised the Six Ministries which were primarily responsible for administration, amending the imperial political system and restraining the emperor’s actions with their proposals, however, the pure and vital position was abolished at the start of the Shunzhi’s (順治) reign due to the dissatisfaction of the Qing emperor at being constrained. The direct measures taken were cutting back the number of Supervising Secretaries and Censors and adding Manchu members and thus increasing their Manchu character. By weakening the power of Remonstrance Officials (言官), the emperor prevented their collusion and strengthened Manchu imperial power.

As a result, Supervising Secretaries and Censors were reorganized, thus Chinese bureaucracy and politics were transformed remarkably during the period when the Ming Dynasty was being replaced with the Qing.

THE DIPLOMATIC SYSTEM OF THE JIN DYNASTY AND THE EMBASSIES FROM KORYŎ: AN ATTEMPT AT THE RECONSTRUCTION OF THE ROUTE OF THE NEW YEAR’S EMBASSY FROM KORYŎ TO JIN IN 1204

TOYOSHIMA Yuka

In this article I examined the diplomatic embassies between Koryŏ Korea and the Jin dynasty with the purpose of revealing new aspects of the diplomatic system in Northeast Asia during the 12th–13th century. I paid special attention to docu-
ments composed by Kim Kŭk-ki 金克己 during his travel from Koryŏ to Jin as member of the New Year's embassy to the Jin court in 1204. To analyze these texts, I first consulted historical sources concerning the court ceremonies of the Jin dynasty and travel accounts to Jin written by Song Chinese, in order to understand the system of diplomatic ceremonies and protocol in Jin. Then, I reconstructed the route of the Korean embassy to Jin based on the information from these sources.

In Part One, I briefly summarized the historical relationship between Koryŏ and Jin, looking at the questions: what kinds of embassies and how many embassies were sent between these two countries? Next, in Part Two, I reconstructed the route between Kaegyŏng 開京 in Koryŏ and the capital of Jin based on the texts composed by Kim Kŭk-ki, travel records made by other Korean embassies to Jin, and travel records to Jin written by Song Chinese. I also drew a map of this travel route based on these results. Further, I also investigated the schedule of the Korean embassy in the Jin capital by comparing it with the schedule of the Song and Xixia embassies during their stays in the Jin capital. For that purpose, I first analyzed sources on diplomatic protocol in Jin and travel records of Song Chinese to Jin, and revealed the schedule and diplomatic protocol applied to foreign embassies by the Jin court in general. By comparing the texts of Kim Kŭk-ki with the information from these sources, I drew a picture of the activities of diplomatic embassies from Song, Koryŏ and Xixia in the Jin capital, and clarified the differences and hierarchy in the treatment toward these three countries by Jin.

The Korean embassy to Jin in 1204, which is the main topic in this article, is one of the earliest embassies sent from the Korean peninsula to a Chinese dynasty as an official embassy to Yanjing (yŏnhaengsa 燕行使). In the later centuries, during the Yuan, Ming and Qing dynasty embassies were frequently sent to Yanjing, with the purpose of diplomatic negotiations, trade and cultural interaction. These activities exerted great influence on society on the Korean peninsula. As a further research topic, I would like to examine the importance of embassies during the Jin period in the context of the history of Sino-Korean diplomatic relations.